

大賞 深海ブルーヒーロー 千住のり子

青い水面がどこまでも広がっている。陽光を反射しきらきらと風ぐ。小さな波は打ち寄せているが、音は無い。匂いもない。時折そよ風が髪を揺らすだけ。

私は何者でもない。好きなようにしている。水着の上に麻のワンピース。こうやって白い砂浜に佇んでいるのも、浅瀬で海月のように浮かぶのもよい。涼やかな空気を肺いっぱい吸い込む。胸に満ちるは淡い淡い懐かしさ。

還りたいなあ。

頭の中で吹き、ゆっくり息を吐きながら顔を上げた。無機質な天井がそこにある。コンクリートの壁に囲われ灰色にくすむ。ここは海ではない。医科大学の睡眠医学ラボ、その片隅のソファード。そして私は博士課程の学生。研究のため現場を離れているが医師免許を持つ。

私は額の汗を拭い、枕元のペットボトルを挿んだ。青くもきらめいてもない水を一気に飲み干す。

「大丈夫ですか、魚住さん」

男の低い声が飛んでくる。脳波計の手入れをしながら日向が心配そうにこちらを見ていた。私はソファーに寝たままヒラヒラ手を振る。

「だいじょうぶ。いつもの事よ」

そしてヨイショ、身体を起こした。

「魚住さん、それ、治らないんですか」

病人にその質問は禁忌だぞ日向くん。

まあ仕方ない。彼は心理畑出身の人間なのだから。私たちは学者の常識は通用しない。

私は左脚を、プラスチックの義足を叩き、につこり笑って答えた。

「うん、一生治らないよ」

私の左脚は無い。数年前、事故で失った。そして私の左脚は痛む。失くしたはずのそれが、激しく焼けるように疼く。

ヒトはそれを幻肢痛と呼ぶ。

今日は調子が悪いな。またジリジリしてきた。季節の変わり目のせいかしら。夏から秋、黄ばんできた桜葉を窓から見下ろす。

幻肢痛は、端的に言えば神経の迷いだ。脚を失くし、途切れた連絡を探して神経は手を伸ばす。闇雲に探し回り、過敏となり、遂には存在しない痛みを捏造し始める。幻だと理性が知っ

ていても脳は確かに痛みをシグナルを受け取っている。どうしようもない。

都合が悪い時は寝るに限る。とりあえず痛みが引くまで眠ってしまおう。

そんな時に毎度見るあの夢を思い出しながら、私はふと日向に聞いてみた。

「日向って夢診断とかできるの？」

「ええ、少しならできますね」

「ふーん、そういや催眠療法専門の心理士なんだっけ」

私は鎮痛剤を口に放る。

「うなざれていますよね。それ飲んで寝てるとき」

日向が私の鎮痛剤を見やる。私は苦笑いで否定した。

「眠くなるのは副作用だけど、夢を見るのは薬のせいじゃないわ。そもそも悪夢じゃないのよ。夢自体はとっても素敵なの」

鎮痛剤をエナジードリンクで飲み下し、私は再びソファーで横になる。

「どんな夢なんです？」

「とても綺麗な海辺にいるの。私はその海に還りたくて堪らないのよ。寝ても覚めても」

義足を外して床に置き、私は目を閉じた。

「という事で私はしばし海に還ります。焼肉会の時間になったら起こして」

疼痛に触まれるとき、私は自由になる。海には音も匂いもな

い。ただ綺麗でいる。ひたすらに静かなそこで、輝く水を眺めている。海の中を漂っていることも、底に居ることもある。でも、海辺に居るのが一番多い。

空は金色のグラデーション、暁の水平線が横切るその下はブルー。何処からか降る白銀の煌めき。踊るようなそれに意識を預け、私はただ佇んだ。

いつからこの夢を見るようになったのだろうか。もう忘れてしまった。今となつては四六時中、この海に還りたくて仕方ない。痛みも苦しみもない青い海に。

「魚住さん、時間ですよ」

日向の声で目を覚ました。

「あーい、了解、ありがとう。先に行つていて」

日向は何度か振り返りながらラボを出て行った。

眠気覚ましに再びエナジードリンクを流し込む。しゅわしゅわ炭酸が弾ける。その刺激とカフェインが私を起こして陸に戻す。カフェインで胃が荒れ時々吐いたりするけれど、どうにもこの方法が一番すすきり目覚めるのだ。ラボの冷蔵庫には大量のエナドリが買い置きしてある。

焼肉屋に着くとみんなもう焼き網を囲んでいた。日向が私に気付き手招きしてくれる。よろよろ歩く私の遅刻は日常茶飯事なので誰も気にしない。並んだ肉は香ばしい匂いを発し始めていた。ジョッキに光るビール。歩くのが苦手な私は車で帰らね

ばならず、呑めない。少し寂しいが疎外感にはもう慣れた。金色に泡立つ液体を羨望と共に眺める。そして始めは他愛ない会話とお肉を楽しんでいた。

肉の脂に塗れ汚れた七輪で真つ赤な木炭が煤を噴く。

その灰が鼻先を掠めて臭いを残した。ゆらゆら、意識の底で嫌な予感。軽い目眩がする。息が上がってくる。やがて左の脚先から、ふくらはぎ、腿を上って腰回りへと、疼痛が戻ってきた。鎮痛剤が切れてしまったらしい。平然を装う顔に脂汗が浮く。肉を焼く音に自分が炙られているような錯覚さえおぼえた。焼ける。灼けつく。瑞々しかった肉が縮んで身を振る。

もう我慢できない。私は荷物を持って席を外した。誰も見えないので追加の薬を飲むつもりだった。薄暗い店中に充滿した焦げ臭さを掻きわけ、手洗いへ。

個室の前、私は派手な暖簾に気を取られ足元の段差に気付かなかった。刹那だけ体が宙を舞い、次の瞬間にはコンクリート剥きだしの床に叩き付けられていた。視界が暗転、いや、明転？内から滲む痛みと外からの衝撃が共鳴し、増幅し合って脚がちぎれそうだった。もうちぎれているのに。激痛に意識すら散りかける私の呻きは遠くの喧騒に掻き消されている。

横たわったまま鞆を漁り、鎮痛剤を取り出した。口に落とす。喘ぎに乾いた舌は上手く動いてくれず、あつと言う間に薬の味が口中に広がった。苦い、苦しい。

えずきながら指で錠剤を喉へ押しやり、飲み下した。もうどこが痛いのかすら知れない。全身が疼いて鉄板の上にいるよう

だ。のた打ち回る事すら出来ず、黙々と炙られる。きつと私は炭になつてもうすぐ……。

「魚住さん？ 魚住さん居ますか！」

トイレのドアを叩く音がした。日向の声だ。

「大丈夫ですか？ 入りますよ！」

そう言えば鍵かけ忘れていたなあ。思うと同時に日向が扉を開けた。足元に転がった私を見下ろす。大柄な彼をこの角度から見ると巨人以外の何物でもない。柔道やつてたから肩幅広い。私にはやつと笑い手を振つて見せた。

「よく気付いてくれれば」

薬で痺れた舌が上手く回らない。

「二十分も戻つて来ないものですから」

「あれ？ そんなに経つてた？」

日向が床に膝を付いて私を覗き込む。

「魚住さんの車まで運びましょう」

「助かるわ。ありがとん」

日向は私を背負つてくれた。私は外れかけた義足を手で押さえながら大きな背に体を委ねる。藤色のシャツの襟に染み付いた紫煙が香っていた。

日向は私を助手席に横たえた。疼痛はますます酷くなつていった。効きかけの薬の副作用も加わり私の意識は朦朧となる。

「何か飲み物買ってきますか」

「そうね……青い水が良いわ……」

うわ言のように呟く私。もう半分夢の中だった。

日向は律儀に青いラベルのスポードリンクを買ってきてくれた。私はそれを火照った額に当てる。フロントガラスから降る店の光がドリリンクに乱反射し、視界が白く濁る。

「あの海の中は、こんなじゃないわね。これくらい濁ってればマリンスノーも見られるのかもしれないけれど……あの海は透明だから……」

相変わらず私は夢うつつだった。

「その状態で運転は危ないでしょう。僕が送ります」

「あら、ありがとん……」

日向がエンジンをかける気配と共に私は青い海へ還る。

焼肉屋は暑かったから、少しクールダウンしたいね。

私は浅瀬に首まで浸っていた。目を閉じ、息を止めて歩を進める。水底の傾斜は急で、間もなく頭の天辺まで海の中へ入った。水流に髪が舞い踊る。

浅瀬から深い所へ深い所へ、海底の砂を踏んでひたすら歩く。いつの間にか呼吸は再開していた。明度を落とす青に包まれ、ゆるやかに息しながら、何もかも忘れ足を進める。砂の中に住む何かから小さな気泡が昇ってゆく。

「着きましたよ」

日向の声で現実には引き戻された。宵闇に咲いた街灯、その白色が目突き刺さる。私の借りているアパートの駐車場だ。鎮痛剤も効き、幾分冷静になった私は日向の帰路を気遣う。

「タクシー代渡すからちょっと待って」

日向は何か言いかけたが、すぐにその口を閉ざした。私はシヨルターバッグから財布を取り出す。バッグが傾いた拍子に鎮痛剤の飲みクズがバラバラと落ちた。

「これで足りるかな？」

二千円を渡す。

「十分です。今夜はゆっくり休んでください」

「ありがとん。日向もゆっくりお休みね」

日向が大通りへ歩いていく。その大柄な後ろ姿が消えてから、私は部屋に入った。



翌朝、目が覚めたら昼近かった。二日酔いのような重い疲れ。このまま寝ていたい気もするが、ラボへ行って解析を進めなければ。

いつもの道を走り、いつもの駐車場に停める。

車から出ると、ガードレールに腰掛ける日向を見とめた。白衣を羽織ったままぼんやりと空を眺めている。口には煙草。休憩中のような。彼の思考を表すように淡く不明瞭に散る煙。

「おっはよ。昨日はありがとん」

私の声掛けで日向が煙草を口から抜く。

「午後ですよ。こんにちは。具合はどうですか？」

「おかげさまで」

私は日向の隣に腰掛ける。日向は煙草を携帯灰皿に押し込んだ

だ。

日向は寡黙な男だ。無理に賑やかな雰囲気を作らないから、傍に居て楽である。休憩時間を共にするには持つて来いの相手だと思う。

「そういえば、これ。お返しします」

日向が封筒を差し出す。何だか分からずに開けてみると、小銭がいくつか入っていた。昨夜のタクシー代のおつりらしい。

「あら、別に良かったのに」

相変わらず律儀だな。私は小銭を財布に流し込む。

その後はしばらく二人で空を眺めていた。駐車場の開けた空に広がる初秋の快晴。こんな良い天気の前を寝過ごしたと思うと少し惜しい気もする。少し遠のいてきた雲と、その向こうの薄水色。私はふと思いついた事を零す。

「私さ、子供の頃、空って海と同じだと思ってたんだ」

「同じ？ 水に満たされているという意味ですか？」

「うん。空の水は寒天みたいなので固めてあるから落ちてこないと思ってた」

私は空へ両手を伸ばす。掴めそうもない遠い憧憬。

「そもそもさ、空も海も透明な水の底に青いビロードの膜が有るんだと信じていたんだ。だからあんなに綺麗な色なんだって思ってた。いつかその青を触りに行きたいなって考えてた。かわいいでしょ？」

「今も触りに行きたいですか？」

日向が急に子供みたいな質問を向けてきた。私は手をヒラヒ

ラ振りながら笑う。

「まさか」

日向は黙ったまま白衣のポケットから煙草を出して啜えた。続いてライターを取り出したが、何故かすぐに戻してしまった。

「あら、吸ってもいいのに」

「……女性の前で吸うのはマナー違反ですから」

「時々吸ってるじゃない。私は別に気にしないわよ」

「いえ、大丈夫です」

歯切れが悪い。私は一瞬見えたライターに興味を持った。

「それ綺麗ね。高そう」

ジッポーと言うのだろうか。四角く分厚い。銀色の表面には繊細な調金細工が施されていた気がする。もっとよく見たくてせがんだが、日向はどうしても出してくれなかった。

日向は間もなく休憩を切り上げ、私も一緒にラボへ向かった。

「今夜は寒くなりそうね」

先程仰いだ快晴とはうって変わり、窓の外、西の空が灰色に染まつている。重く低く垂れこめた鈍い雲。

「嫌だなあ。秋と曇りは痛みが増すんだよなあ」

日向は特に相槌を打たない。いつもの事である。大きな足を擦るようにちよこちよこと、私の歩幅に合わせて寡黙に歩く。

ラボに入ると見知らぬ青年が昼食していた。私を見とめると慌てて煮魚を嚙下する。そしてパツと立ち上がり頭を下げた。

「初めまして先輩！ こんにちはわっす！」

れを私の眼前に掲げる。人差し指に染み付いたヤニの黄色と、重みのある銀色が静かに滲んでいく。ぐるぐるぐるぐる唐草模様。

「もう指輪焼けも消えたし、良いでしょう」

「日向、何を言って」

ボツ。ジッポーが点いて火花が弾けた。

ばち。同時に私の中で何かが弾けた。

「魚住零さん、貴女の左手薬指は無事でした。そうですよね？」

日向の声しか聞こえない。白銀の唐草しか見えない。無機質なオイルしか香らない。

「……うん」

「痛みも出てきたみたいですし、眠りましょう」

パチン。閉じた蓋から軽い金属音が鳴る。

からん。私の手から空き缶が落ちて軽い金属音が響いた。

我に返る。空き缶を拾いながら、うっとりとした重い眠気に包まれているのを感じた。私は脚を引き摺りソファへ歩く。

「おやすみなさい、魚住さん」

風で窓枠が揺れている。天気が下り坂になってきたようだ。

「んー……おやすみ……」

私は義足を外し、横になって瞼を閉じた。

扉の開く音で覚醒。夢も見ず深く寝入っていたようだ。

「ただいまーっす」

影山が陽気に片手を上げる。私もそれを真似た。

「おかえりーっす」

「脳波取ってきましたー。疲れたっす」

影山は下半身を投げ出して椅子に座った。私は上半身を起すが、寝足りなさを感じていた。頭が重い。

ふと時計を見る。夜八時。影山が出て行ったのが四時半くらいだから、まあ随分と長い昼寝をしてみたものだ。私は乱れた髪を撫でつける。

「いやーでもすごい物見ちゃいました」

影山が怠そうな姿勢のまま、しかし興奮した様子で告げる。

「日向さんが催眠術をしている間の脳波を測ってきたんすよ。脳波はぶつちやけよく分らないんですけど、催眠術見てるのは面白かったっすね。こう、日向さんが、患者さんの目の前にライターをかざして火を灯す！すると急に患者さんがトロンとしてきて」

ライターを扱う手振りを真似ながら、ふと言葉を止める影山。

「やつべ。内容は守秘義務なんだった。すみません、今の忘れてもらっていいっすか」

「あはは。良いよ。忘れた忘れた」

私は笑顔で手をヒラヒラ振る。でもその裏で私は喉につっかえる感じを、忘れた何かをもう少しで思い出しそうな感じを噛み締めていた。

催眠療法を専門とする臨床心理士の日向……。

何となく自分の左手に目を落とす。

薬指だけマニキュアが塗られていなかった。

その夜。家に帰って見た夢はいつも様子が違った。

私は海底の白砂を散らし、深い方へ深い方へと急いでいた。髪がゆるやかに流されて広がる。

しかしどうにも嫌な色がちらついていた。血色の珊瑚。烏色の虚ろなうつぼ。千切れて流れてくる、茶色の海藻片。心地良かった海が何かに汚されてしまったようだ。影が差してしまっただようだ。

やがて大陸棚の縁に辿り着いた。切り立った崖。ここから先はずっとずっと暗い深海で、数メートル先も見通せない。そのはずなのに何故か、何故か遙か向こうに有るそれに気付いてしまった。

黒い箱だ。一辺が四十五センチほどの立方体をしている。どこが蓋だか分からないくらい歪みない立方体だ。

夢と現実の境で、起きかけの私が問い掛ける。

どうしてその大きさを知っているの？ 立方体キューブにしか見えな
いそれを、箱だと知っているの？



図書館は苦手だ。まず、床にしかれたカーペットが苦手だ。義足が引つかかかって歩きづらい。とても疲れる。しかし解析に資料が必要だ。私は仕方なく大学の附属図書館へ向かっていた。

黄色く染まり切った銀杏。夏服が不足に感じる日も増えてき

た。私は歩きながら白衣のボタンを留める。白衣は薄手の上着として優秀である。

図書館の入口をくぐるとすぐ、古びた紙の匂いに満ちる。手元のメモと地図を照らし合わせ、迷路みたいな書架の奥へ奥へ私はよろよろ歩いていく。

図書館は苦手だ。何より、本の壁が苦手だ。恐ろしいほどの圧迫感。威圧感。背表紙全てからきつく睨まれているようにすら感じる。図書館に限らず、パソコン室や博物館、アーカイブ室も苦手だ。山ほどの情報が蓄積された場所が嫌いなようだ。研究は大好きなはずなのだが。

そういう場所でもなくても調べ物をしていると時々急に怖くなってそれ以上調べられなく、知りたくなくなる事がある。そもそも情報や知識なんて好んで集める物ではないのかも。そんな風に思う事もある。

私は一応医師免許を持つ。短い時間ではあったが、かつては臨床の場に立っていた。自分や家族の病気について「知らない方が幸せだった」と口にする人も、行動からそう思わざるを得ない人も沢山見てきた。知らなければケロッと通り過ぎたかもしれないのを知ってしまったが為に怖くて半狂乱になる。

例えば手術。手術をします、そうですか。その遣り取りで済めば簡単なのだが、我々には術式を詳細に説明する義務がある。まず皮膚を何センチほど裂きます。次に筋肉をべりりと剥がして避けます。腹膜を切ります。見えた腸を一端腹から出して脇に寄せます。やっと出てきた子宮を……とか説明しているうち

に自分の身体が思いの外ぐちゃぐちゃにされると気付いて怖くなる。麻酔で寝ている間の事を心配した所で詮無きこと、なんて問題ではないのだ。

例えば余命。あと何週間かで退院出来るかななんて楽観的だった人に告げねばならぬ事もある。急に暴れはじめたり塞ぎ込んだりする例も少なくない。家族も変な宗教に凝り始めたり、病院を変える医者を変えろと現場を混乱させたりする。足掻きに狂う人たちはまだマシかもしれない。死にゆく者と向き合えず家族が面会に来なくなり、どんどん患者が孤独になるよりは……。

情報は、知識は、それを受け止めるだけの鞘を持たない限り凶器でしかない気がする。持つているだけで手を傷付けていく。剥き出しの金属片のように。

そんな事を考えていると、ふと書架の向こうを横切った人影に目を奪われた。細く小柄な女の子だ。抗えないほど気になつて私は彼女の後を追つた。

彼女は西日の当たる机で本を読み始めた。私はその様子を柵の陰から窺う。この図書館に居るからには大学生なのだろう。しかしその顔には幼さが残り、少女と呼んだ方が近そうだった。アッシュ色の髪を肩まで流している。丁寧化粧された顔と大きな瞳。割と骨ばつた輪郭。焼けた肌。

私はしばらく少女の横顔を凝視していた。オレンジ色の光に染められて彼女と世界の境界が霞む。頭の中で何かが叫びだそうとしている。海の果てで黒い立方体が揺れる。ガタガタガタ

ガタ。渦を巻く橙の現実と夢想の紺に吞まれて飲まれて。キーンコーンカーンコーン

鳴り響くチャイムで目が醒める。いけない、資料を取って帰らないと。ゼミが始まってしまふ。慌てて図書館中を歩き回り医学誌を何冊か抱える。

帰り際どうしても気になつてもう一度同じ書架から覗いてみたが、少女はもう居なかった。

秋の夜は早くて長い。ゼミが終わればもう夜中。

「魚住さん、大丈夫ですか？ 今日日は随分ぼんやりしていますね」

日向が資料を片付けながら言う。

「あー、そうね……さつき一目惚れしちゃったかも」

私はおどけて頬に手を当ててみせる。実際のところ、そう疑いたくもなるほど図書館の少女が気がかりであった。

「誰にですか？」

「俺も知りたいっす」

日向が食いついてきた。影山も参加してきた。

「影山くんはともかく、日向が私のジョークに乗ってくるなんて珍しいね。今夜は雪かー」

言いながら冷蔵庫を開ける。買い置きのエナジードリンクが尽きていた。そつと足元を這って行く冷氣。

「そうだねえ、お使い頼まれてくれたら教えてあげる」

私は日向に小銭を渡し、いつものエナジードリンクを買って

くるよう頼んだ。百円玉が大きな手に落ちる瞬間、何故だか人差し指に染み付いたヤニが気になった。日向は席を立てて自販機に向かった。

日向が部屋を出ると、お喋り影山はここぞとばかりに話し出す。

「そうそう、教授から聞いたんですけど、日向さんってすごいですね」

「すごいって何が？ 仏頂面が？」

「ははは、確かに驚くほど無表情つすね。ぶつちやけ怖いけどそれはともかく。日向さん、催眠術の天才らしいんですよ。業界ではかなり有名だとか」

影山は興奮して早口になっている。

「へえ、あいつがねえ」

私は素直に感心する。年下ながら臨床が長かったのは知っていたけれど。

「実は日向さんが大学院に来たかったんじゃないかと、教授が催眠と脳波の関係を研究したくて招いたらしいんです。道理で教授が敬語使ってると思」

扉の開く音。予想外に早く日向が戻ってきて、影山はその軽い口をつぐんだ。私はキンキンに冷えたドリンクを日向から受け取る。

「ありがとん。はあ、毎度の事ながら胃が痛くなる予感」

私は鎮痛剤を口に入れた。そんな私を影山が笑う。

「そんなカフェイン強いので痛み止めなんか飲むからですよ。」

エナドリ好きなんすか？」

私は缶に口を付ける。化学調味料の苦味と、べたつくほどの甘味。決して好きな味ではないはずなのに何処か懐かしい。炭酸の刺激は浜辺の砂粒を思い出させた。

「そうね。好きみたい。飲まないと落ち着かないわ」

カッン、缶を小脇に置く。私が一息つくとき影山はニヤニヤして尋ねた。

「で、誰つすか？ 一目惚れの相手って」

「あー。図書館で見掛けた女の子がどうにも気になって。どこかで会った事あるのかもしれない。誰なんだろう」

私は頬杖を付く。少女の横顔を思い出すと、頭の中でウゴウゴ何か蠢いた。

「デジャヴって言うのかな？ 気になり方が尋常じゃない」

「なんだ、そんな事つすか」

「冗談を真に受ける方が悪いのよ」

馬鹿なやり取りを背中であく日向。その解析の手は止まっていた。

「……関わりない方が良いと思いますよ」

意味深な一言を残し日向はもう解析に戻っていた。私と影山はきょとんと大きな背を見詰め、そして顔を見合わせた。ちよつと怖くなるほど固い語勢だった。

しかし、止められると余計気になるのが人の性（まぶ）であろう。

翌日の夕方。私は図書館の入口で張り込んでいた。自動ドアの外では大銀杏から落葉が始まっている。さながら金の扇が不規則に乱れ降るよう。それを延々眺めながら私はただ待っていた。あの子が来るかどうかなんて分からなかった。とにかく何かせずには居られなかった。この違和感を、既視感を、何とかせねば。意識の端に立方体の影がチラつく。解析にも集中できないし、このまま夜まで時間を無駄にしても良いと思っていた。しかし運命は気紛れ。三十分と待たずに彼女が通りかかったのではない。高鳴る胸を押さえ私は少女の後ろ姿に声を掛ける。

「ねえキミ」

少女が振り向くと、一瞬で満面の笑みが変わった。深いえくぼに明るいソプラノが響く。

「わあ、お久しぶりです！ 歩けるようになったんですね！」

私は呆気にとられる。少女の大きな瞳がちよっと慌てる。

「あ、ごめんなさい。そちらから声を掛けてくださったのでつきり……。覚えてる訳ないですよ。潮兄ちゃんのお葬式で会ったきりですものね。あの時は車椅子だったので心配していました。本当に良かった」

まだ状況の飲めない私に少女が続ける。

「私、潮お兄ちゃんの、えびはらうしお蛇原潮の従妹です」

「……蛇原潮」

意志の支配を超えた所から、知らない名前が口を突く。じわりじわり。疼痛が昇る。無いはずの左脚の指から、足首、ふく

らはぎを伝わって。強い風が吹いて轟音と共に銀杏を散らし、夕陽を隠す雲が払われた。真つ赤に染まる世界。

不意に大きな手が力強く私の肩を掴んだ。日向だ。

「君、失礼。僕はこの人に用事が」

日向が私を乱暴に引つ張る。呆気にとられる少女を残し、転びそうな私を図書館の外へ引きずり出す。見たこと無いほど乱暴な日向。

「待って。待って日向。脚が痛い」

私は悲鳴混じりに言う。木枯らしの撫ぜた全身が軋む。日向は冷たい声で突き放した。

「そうでしょう。解けかかっていますからね。僕がその痛みを取って差し上げます」

ただでさえ混乱する思考へ意味不明な言葉が注がれる。日向は私をどんだん人気の無い方へ引いていく。やがて大学と大病院の連絡通路、その真ん中のベンチに私を座らせた。私は全身に汗をかいてフラフラしていた。

誰も通らない連絡通路を静寂が包む。大学の方から紙の匂いが、病院の方からアルコールの匂いが、そとと流れてきて私達の周りで緩やかに混ざっている。西側に羅列した窓から夕陽が注ぎ、通路を真紅に染め上げていた。ガラスの向こうは銀杏や桜の紅葉黄葉が乱れモザイクのように外とこの異空間とを隔ている。

日向は私の正面に膝立ちし、目線を合わせた。

「全部僕のせいです。貴女がそうして苦しむのは」

「どういふ事？ 尋ねる気力さえもう残っていないかった。私はただ荒い息で日向の語りを聴く。」

「人の心というのは時に不思議な投射をします。深く傷ついているのは心なのに、それを認めなければ身体が痛い、と錯覚する。そして貴女が『一生治らないと決めている』ように、このままじゃ貴女の疼痛は永遠に癒えない」

日向が悲痛に目を伏せる。無表情な、日向が。「僕は貴女を救いたかった。でもこの方法は間違いだつたのかもしれない」

言いながらゆっくりと右手を上げる。その手の中には催眠術用のジッポーが鈍く光っていた。唐草模様に刻まれた混迷。

ボツ。音を立てて炎が灯る。赤と青をない交ぜにして揺れ伸びる。

「魚住 零さん。もう終わりにしましょう。全て思い出してください」

何もなはずの膝には、あの漆黒の立方体キューブが乗っていた。立方体の蓋が弾け飛んで中から全てが溢れ出す。



潮騒。私は帽子をちよつと上げて見通しを良くする。朝焼けが空を金に染め上げている。それでも海は他人事のように青い。鼻を突く磯の香。座り込んだ砂浜の感触。左のサンダルに砂が流れ込んできて、私は足を振る。

「なあ零」

陽気なテノールボイスに振り向く。日焼けした横顔が海を見たまま悪戯っぽく問う。

「オレ達付き合ひ始めて何年経つた？」

「数えてないわよ。中学からだから面倒で」

「だよな」

チョコレート色の頬にえくぼ。化粧したかのように大きな目が細くなる。彼は、潮は脇のクーラーボックスからエナジードリンクを出してタブを引いた。

「海に来てまでエナドリ？」

「だってコレ美味いんだもん。零も飲む？」

「カフェインは胃が荒れるから嫌いだって何度も言ってるでしよ」

潮は笑って聞き流す。私は肩をすくめた。

塩の匂いが強くなつて涼しい風が渡る。私は帽子を取った。

髪の間を籠っていた汗が乾き、気持ちいい。ワンピースの袖や襟からも風が入り水着を撫でていく。

「オレさ、子供の頃、空つて海と同じだと思つてたんだ」

唐突な語り口はいつものこと。私は相槌する。

「同じつて？」

「水でできてるつて意味。空の水は寒みたいなので固めてあるから落ちてこないと思つてた。水平線に寒天を混ぜる装置があるんだよ」

潮は空へ両手を伸ばす。

「そもそもさ、空も海も、透明な水の底に青いビロードの膜が有るって信じていたんだぜ。いつか飛行機か潜水艦に乗って布の青を触りに行つてやる、なんて考えてた。かわいいだろ？」

「馬鹿な潮らしいわね」

私は冷ややかに言う。潮は慣れつことばかりに相変わらず笑っていた。

途切れる会話。穏やかな沈黙。潮騒。

数分のそれを破って潮が言う。

「って事でさ、そろそろリセットしない？」

意味を汲みずにいると潮は私の左手を取った。薬指に嵌めるは、白銀の指輪。潮は恰好付けて言う。

「交際年数のカウントをさ。結婚何年目って数え方に」

私は声を失ってただ指輪を眺めていた。滲みるように湧いてくる歡喜の前に、はっと我に返る。

「ちよ、ちよっと待つて。私まだ大学生よ」

「オレが社会人だから問題なし。貯金三百万あるし」

潮がヒラヒラと手を振る。その軽薄な仕草、やめるよう何度も言つたけど結局直らなかつた。

「零はお医者さんになるんだからさ、今のうちに結婚しちゃった方がめんどくさくなくて良くない？ 蛭原先生で通そうぜ」

「……それもいいかもしれない」

私は左手の薬指を海にかざす。海の青と、空の金と、指輪の銀が混ざり合いキラキラ。記憶に深く染み付いてゆく。

結婚の準備で飛ぶように過ぎる夏。互いの実家やら式場やらを巡り歩き、私は日焼けしていった。

晩夏の午後。微かな秋の気配を感じるがまだ暑い。空はどんなよりした曇りだが紫外線は容赦ない。バスを待ちながら私は日焼け止めを塗り直す。

「塗つても塗つても足りないわ」

溜め息をつく私。指輪をずらしてみると、跡がくつきり残っていた。潮はそんな私を茶化す。

「零は白すぎたから丁度良いんじゃないの」

「潮が黒すぎなのよ。紫外線ばっかり浴びて、そのうち皮膚がなんか白内障になっちゃうわよ」

潮はサーフィンが趣味で毎週海に通っていた。

「心配してんの？ ありがとん」

潮はおどけて笑う。この余裕は何処からくるのか。呆れ半分愛しさ半分の溜め息を吐く。

この軽さに何度救われただろう。私は物事を深刻に捉えてしまふタイプだ。ちよっとした問題ですぐに行き詰り身動きが取れなくなる。そんな私を笑い飛ばし、手を引いてくれたのはいつだつて潮だった。

逆に潮は考え無しに動き、最悪手にも易々と手を出した。勉強が嫌いだから中卒で就職なんて聞いた時は散々叱り飛ばしたものだ。彼の両親と結託し説得、とりあえず工業高校まで行かせ幾つかの資格を取らせた。おかげで即戦力として成長中の企業に就職でき、第一線で働いている。

互いがいたから順調に大人になれたような、そんな二人だった。

バスが排ガスを撒き散らしながら滑り込んできた。私達はステップを踏んで一番後ろの席に座る。私はバッグを開け、忘れ物が無いか確認する。実印と、畳んで封筒に入れた婚姻届。目的地は役所。私は封筒の角をそつと撫でた。

低周波を発しながら動き出す路線バス。しばらく私は潮の肩にもたれ、ぼんやりと窓の外を眺めていた。近付く秋の気配に街路樹が褪せてきている。今にも雨が降り出しそうな重い重い曇り空。

誰かが停止ボタンを押す音がした。

眼下をバス停が通り過ぎる。あれ？ ざわつく車内。過ぎ行く景色がやけに速い。

「誰か！ 医者はいないのか！」

一番前、運転席の脇で乗客が叫ぶ。

「待ってて」

私はバッグを潮の膝に押し付けて立ち上がる。まだ医者ではなかったが、多分この中では最も医者に近い人間だ。不安に揺れる車内を走り抜ける。

運転席へ駆け寄ると、紫色の唇で白目をむいた運転手が居た。

初老の男性客は必死にブレーキへ手を伸ばす。しかし硬直した運転手の脚が邪魔で届かない。私は運転手の頬を叩き呼びかけた。首に触れると冷たく、脈動はなかった。

客席から起こる悲鳴。顔を上げるとバスは反対車線に飛び出

していた。そのままスクランブル交差点を横切り、目の前に満席のファミレスが迫る。私は咄嗟にハンドルを切った。バスの片輪が浮き、足元の男性客が何処かへ投げ出された。私は必死にハンドルに縋りつく。逆方向へ回してなんとか立て直そうとする。

勢い余ったバスはスピンして、交差点の真ん中へ躍り出た。八方から迫る大小の車とブレーキ音。鼓膜を引き裂くようなそれに包まれ気を失った。

私はすぐに目を覚ましたようだ。目の前には、かつてバスだった歪な通路がある。

潮！

私は叫んだが、自分の声すら聞こえなかった。騒音にやられたか衝撃でやられたか。ギギャギギャと金属を引っ掻くような雑音で耳がいつぱいになっていた。ノイズに攪乱された世界で手がかりを探し、嗅覚が敏感になる。各種金属の酸っぱさと焼けたプラスチック、焦げた布、崩れて形を失った人間の気配、そして焼いた肉の臭い。

嘘、嘘。私のせいなの？

服に誰かの血が染みってくる。ハンドルを握った形のまま硬直した自分の手。この手がこの惨事を生んでしまったのか。まさか、まさか潮も。

ねえ、潮、何処に居るの！

私は何度も潮の名前を叫びながら、血とガラスの花道を這っ

て行った。駆け寄ろうという発想はなかった。自分は立ち上る状態にないと、本能が知っていた。捻り出された排泄物を、脂臭い脳の屑を、掻き分けて私は泳いでいく。煙って曇る視界の先へ、赤い川をさかのぼる。雑音は止まない。

一番後ろの席は無かった。こちらに迫り出した窓枠から危険物ローリー車のタンクが見えていた。まるで不気味な絵画だった。タンクから漏れた何かが燃えて、両脇から燭台のように照らしていた。

朱い灯りの中で私は見付けてしまった。それは頭皮ごと千切れたアッシュ色の髪束だった。潮の髪だった。まるで床から生えているかのようにペチャリと張り付いている。ダメだダメだ、私の中で小さな理性が叫んだのに、そのまま視線を奥へやった。やってしまった。

潮が倒れていた。一見すれば頭に怪我しただけにも見えただろう。

抱き上げて、お願い頑張つてと耳元で叫び、生き残るかも死んでしまうかもと期待と不安に揺れながら段々と現実を受け入れられるような、そんな結末ならどんなに良かったらうか。でも私には、少し角度がおかしい首の中で、碎けた頸椎が脳幹を潰しているとすぐに推せた。それが即死に値すると知っていた。ぐちゃぐちゃに掻き乱された脳のアトラスがリアルに展開されていく。その残酷さに感情のヒューズは飛んでしまった。私は潮だった死体から目を逸らす。

炎は座席の残骸を伝って燃え広がる。戯れに火を目で追って

いると何かが目に入った。私のバッグだった。場違いなまでに綺麗だった。

私はそこから封筒を出した。封筒も綺麗なままだった。中から婚姻届を引き抜く。そしてそれをそっと、すぐ傍まで迫った炎に翳した。何故か微笑みが零れた。全てを諦めてしまった時におこる、力の抜けた笑み。相変わらず金属の不快音が響いて自分の声は聞こえないのだけれど、潮に向けて呟く。

さよなら、潮。私もすぐに行くからね。

婚姻届に火が移り、炭に変えていく。綺麗な思い出と約束をただの漆黒に変えていく。

指先に火が届くか届かないか。そこで私の意識は閉じていった。



「あのまま一緒に燃えてしまいたかったのに、どうして私だけ生き残ったの」

膝の上の手に雫が落ちて弾けた。

「……死にたい。死にたい、死にたい、死にたい死にたい！嫌だ！ 独りぼつちは嫌だよお！」

私は爪で顔を掻きむしろうとする。日向が私の両手首を掴んだ。

「そうして泣き狂う貴女を見ていられたかった」

一瞬涙の引いた視界に、歯を食いしばって泣きそうな日向が

浮かぶ。私は日向の手を振り払おうとするが敵わない。圧力で痛む手首にうつすらと刃物で切り裂いた跡が見える。

「貴女は生きなければなりません。貴女にはご両親が、友達が、恩師たちが居ます。彼らを悲しませてはなりません。潮さんを失った貴女と同じ想いをさせてはいけません」

「解つてるわよ！ だから苦しいんじゃないの！ 死にたいっていくら叫んでも、死ぬ事なんて出来やしなわい！」

何度も何度も死のうと思つた。ナイフをロープを幾度となく手に取つた。でもその度に家族や仲間が、私と同じ悲痛に喘ぐだろう人たちが想われて出来なかつた。病院で見てきた霊安室の様子が、私の愛しき人たちと似た彼らの悲劇が思い出されて、出来なかつた。

潮を失くした苦しみを誰にも打ち明けられなかつた。インターン時代に回つた精神科で、死別経験の吐露がどれ程聴き手を傷付けてしまふか知つていた。同僚も、時に経験豊富な医師でさえも患者の痛みが移つたかのように心を病みかけていた。

潮が死んだのは自分のせいのような気がしていた。潮だけじゃない、全ての乗客の怪我と死が自分の責任に思っていた。あの時、運転手の様子を見るより先にハンドルを取つていれば。ハンドブレーキを引いていれば。あのままファミレスのガラスをクッションにしていれば。意識を失うより先に再発進していれば。医学者なのに、医学者のくせに誰も救えなかつた。

彼を亡くした世界から現実感が薄れ、罪の意識だけが鮮明だった。苦しくて何も出来ないけれど何かせずには居られない

かつた。幸か不幸か私は医学者だつた。身体の何処をどれくらい傷付けても無事でいられるか、よくよく知つていた。何度も責める真似事で死ぬ真似事で傷を増やした。

「出来ないから叫ぶのよ！ 死にたい死にたい！」

「……今、脚は痛くないですよね」

日向に問われハツと気付く。疼痛を孕む幻の左脚は消え失せていた。

「全部僕のせいです。悲しみが風化するまで忘れていたよう、僕は貴女に催眠をかけました。それが過ちでした。貴女は医学の知識がある。抑圧された痛みは無意識にそれらしい形を選んで、『一生消えない幻肢痛』となつて貴女を苦しめました」

今更のように思い出す。

私は夏休みが終わつてもラボに顔を出さなかつた。心配した日向が私のアパートを訪れた。荒れ放題の部屋と傷だらけの私にさぞ驚いたことだろう。それでも日向はプロだつた。カッターナイフを手を泣きじゃくる私から上手に事情を聞き出した。そして私をベッドに座らせ、目の前でライターを鳴らしたのだ。

「乗り越えたいですか？ 封じたいですか？」

問を、日向は傾けた。

「僕にはそれしか出来ません。あの時も、情けない事に今もです。でも今回は貴女が決めてください。選んでください。孤独に耐えながら喪失感が褪せるのを待つか、全てを抑圧し代償の痛みを一生負うか。前者を望むならカウンセリングを、後者を望むなら催眠を、僕がしてあげます」

日向の囁き。答は決まっていた。

「痛い方がずっといい。このままじゃ私、壊れちゃう。忘れさせて」

何もかも私は知りすぎていた。医者であるばつかりに。他人を守るメスは重く、握る手が弱った瞬間ナイフとなって私を裂いた。しかし私には使命がある。傷が癒えるまでこの知を手放すなんて出来ない。ならば。

「……わかりました」

日向はジツポを掲げる。絡み合いながら伸びつづけ、果てる事を許されない唐草の蔓。長寿の象徴は私に過酷な運命を課す。

ボツ。

「では、それを封じ込めてしましましょう。魚住 零さん、貴女は今から忘れたいモノを箱に詰めて捨てに行きます。目を閉じてください」

私は言われるがまま目を閉じた。日向の声が耳を抜けて胸、腹の底まで入ってくる。

「まずは箱を決めましょう。どんな箱が良いですか？ 材質は？ 形は？」

「黒い箱が良いわ、中身が見えないように。立方体が良いわ、何処が蓋だか分からないように。硬い素材が良いわ、簡単に壊れないように。大きい方が良いわ、全て詰められるように」

イメージの世界へ閉じこもった私の膝の上に、あの立方体^{キューブ}が現れる。

「黒い大きな立方体の箱ですね。貴女はそれに忘れたい物事を

詰めます。忘れたいのは何ですか？」

閉じたままの瞼、その隙間から涙が染み出て流れる。

「う、うし、潮。潮との思い出全てよ。勿論あのバス事故、潮の死に様も全部」

もう『潮』と声に出すのも辛かった。辛いけれど、抱えているのはもつと辛い。

「潮さんの思い出。それを箱に詰めましょう。詰めるには形が必要ですよ。どんな形を与えましょう？」

私は潮の言葉を思い出す。

「青いビロードの布にするわ。彼が大好きだった海の底にあるビロード。とても触り心地が良いの」

「なるほど。青いビロードの布ですね。思い出の分、その布は大きいでしょう。丸めて入れますか？ 畳みますか？ 引き裂きますか？」

「畳みたい。大切な思い出だから。今は辛いだけだけど、大好きな潮の事だから……！」

私はぎゅつと眉間に力を込める。涙は溜れることを知らず、溺れてしまいそうだ。

「力を抜いて、魚住 零さん。さあ、思い出を畳んで入れて」

私は一度だけ深呼吸をし、イメージの世界で青いビロードを手にとった。たおやかに手に沿う上質なビロードだ。よくデートに行った海の色をしている。私は艶やかなその端と端を合わせ、丁寧に畳んでいく。起毛が指先をなぞるたび思い出がちらついては消えた。ちょうど四十五センチ角くらいになった所

で優しく、労わるように箱の底へ敷いた。

「何処へ捨てに行きましようか」

「遠ぎけたいけれど、決して変な所に捨てたくはないの。海の底が良い。深い深い海の底よ。潮の探していたビロードが、有るはずだった海の底。私以外誰も知らないの」

「そっすね。では、海へ行きましよう」

日向が言い終わるか否かの瞬間、私はあの海辺に移っていた。潮が私に指輪を嵌めた砂浜だ。キラキラと静かで、朝焼けのま時を止めている。足元にはクーラーボックス。

私は海へ歩み寄り足を浸した。そのまま前に進み、身体を水の中へ沈め、歩いていく。海の中には海藻や珊瑚が生えているけれど能動的に生きる物は何もなかった。うつぶやヒトデもただ横たわり蠢きもせず転がっていた。ひたすらに静かで静かでも私を逆撫でするものなど何もない。生きているのは、私だけ。

やがて私は大陸棚の縁に立った。遠ざかるにつれ黒みを増す青。

「捨ててください」

私は両腕を広げる。抱えていた立方体キューブが流されていく。暗い方へ黒い方へと遠ざかる。漆黒の立方体キューブはやがて、深海の黒に馴染んで見えなくなってしまう。

腕の中が空になった。軽くなった。私はふう、と溜め息を吐く。それを合図としたように日向は言った。

「貴女のような人を見る度、僕は考えるのです。『死にたい』というその言葉は余りに短く便利すぎる。『死にたい』とは本当

は、穏やかに幸せに生きたいと……苦痛を除き、優しい静寂の中で休ませてほしいと……そういう意味なのではないかと。それを語るには貴女たちはあまりに疲れすぎていて、身近な言葉に頼ってしまうのではないかと」

日向の慈愛に満ちた問いだけが響く。私はもう何も考えていなかった。

パチン、ライターを閉じる音。

「零さん。僕は貴女の還る新たな海になりたいと、ずっとそう思っていますから。貴女がその心を開いてくれるのを、ずっとずっと待っていますから……」

残響の中で、私は暖かな眠りに落ちていった。



目が覚めるとラボのソファに居た。頭がぼんやりしてはいるが、とても気分が良い。時計を見ると朝五時半だった。外の空気でも吸おうと、私は義足を嵌めて部屋から出る。

自動ドアを開くと、日向がガードレールに腰掛けタバコを吸っていた。暁の空に煙が立ち上る。日向は私に気付くとその火を揉み消した。

しばらくは二人で並び、刻々と鮮やかになる朝の空を眺めていた。涼風が吹いて何処からか銀杏の葉を運んでくる。穏やかに淡い気分になり、私はそっと囁く。

「日向、ありがとうね」

日向がガードレールをずり落ちた。白衣のポケットから煙草が散らばる。

「覚えているんですか？」

蒼ざめた日向を私は笑う。

「はは、覚えている訳ないじゃない。何を忘れたかなんて分からないわ。でも『忘れてしまったという事』は覚えているの」

そして最後に言ってくれた事も。

「普通は忘れた事すら忘れてしまうのですが、失敗ですわね」

日向がわずかだけ悔しさを滲ませながらガードレールに座り直す。私は含み笑いしながら言った。

「あんな泣きべそかきながらやるからよ。動揺してればいくら天才様でも失敗なさるでしょ」

無表情なまま日向の耳が真っ赤に染まる。さつきから青くなったり赤くなったり忙しい男だ。組んだ腕が居心地悪げにモゾリと動いた。

二人で再び空を仰ぐ。秋の気配が深まってゆく高い高い空。遠い青と半透明の薄い雲。ふと思いついた事を私は告げる。

「私さ、子供の頃、空って海と同じだと思ってたんだ」

「……水に満たされているという意味ですか？」

「うん。空の水は寒天みたいなので固めてあるから落ちてこないと思ってた」

私は空へ手を伸ばす。遠く優しい理想。

「そもそもさ、空も海も、透明な水の底に青いビロードの膜があるって信じていたんだ。いつかその青を触りに行きたいな、

なんて考えてた。かわいいでしょ？」

「今も触りに行きたいですか？」

日向が急に子供みたいな質問を向け、私は素直に答える。

「うん。いつか行きたい」

自然と微笑みが零れた。日向が驚いたような顔でこちらを見る。

「何よ」

「いいえ」

すぐいつもの仏頂面に戻り、日向は言った。

「いつか行きましょう。僕がお供します」

微かに香る紫煙の果てに潮騒の空耳。暖かな海に浸る幻。秋風が吹いて揺れる髪は潮に流れていくように。私は長い息を吐いて目を閉じる。

「そうね。日向が一緒なら安心だわ」

くだらない夢見がちなやり取りだけど。空の青も海の青も日向とならいつか触りに行けそうな、そんな気がしていた。

大賞『深海ブルービロード』